



若者へのメッセージ 19

千葉工業大学惑星探査研究センター所長

松井 孝典

【第三回】覚悟を決めることの重要性

たった一度の人生だから、毎日、悔いなく過ごせる夢を描こう。覚悟を決めて精一杯、好きなことに時間を使って生きていけば、必ず道は開けるものだ。覚悟を決めてしまえば「無」の心境となり、迷うことはない。

好きなことを続けられるなら それでいいと覚悟を決めた

前回は、研究者の道を志して、大学院に進学した頃のことを述べた。自分の才が、着想の斬新さにあることに気づかされたが、だからといって、学者として将来食べていけるのか、そんな自信は全くなかった。その評価をするのは他人であり、それぞれの評価基準は研究者により千差万別だからだ。しかし、その時点で、たとえ展望が開けなくても途中で他の職に就職すると

か、そんな転身は全く考えなかった。学者としての道がすぐに開けなくても、好きなことをしているのだから、アルバイトをしても食いつないで研究していればいいと思っていた。

幸い、博士号を取得した後、米国にポスドク（博士研究員）の職が見つかり、そこで研究生活を続けているうちに、東大で助手の口が見つかり、帰国して学者の道を歩むことができた。研究室の学生の指導をするようになったが、しばらくして、ある時期から、筆者のように、就職口がすぐに見つからなくても、好きなことを

続けられるならそれでいいと、高たか括くって研究室に残る覚悟の学生はいなくなった。

周囲の学生や先輩を見て、自分の能力の限界を感じ、研究者としての将来を見切って転身する学生がほとんどになったのだ。社会が豊かになり、世間的にそんな風潮が一般的になったのかもしれない。定職に就いて、会社から貰もらう給料で食べていくことが当たり前の風潮になったということだ。そんな状況を見るたび、工学部や他の学部ならいざ知らず、理学部や理系大学院に進学する、すなわち、研究者を志すことなのだという覚悟ができていないのかと、残念に思っていた。

日本で職が見つからなくても、外国でポスドクを続けているうちに、いずれどこかに職が見つかるだろうというのが、我々の世代では当たり前だった。そもそも博士号を取得した後、就職口がなくても、オーバードクターと称してアルバイトをしながら研究室にたむろしている、そんな若手研究者が多数いることが当たり前な時代だったのだ。みんな、好きなことをしているのだからと、覚悟を決めて研究を続けていたのだ。

たった一度の人生なのだから

高校生への講演会では、よく学生時代に夢を

色紙
プレゼント
のお知らせ

■松井孝典先生ご揮毫の色紙を1名様にプレゼントいたします。官製はがきに、「松井孝典先生の色紙希望」と明記のうえ、「若者へのメッセージ」に対するご意見・ご感想を添えて、編集部宛にお申込みください。締め切りは12月27日（火）です。ふるってご応募ください。なお、色紙の発送をもって発表にかえさせていただきます。



見ることの重要性を説いている。夢を見るといっても、単に夢見るだけの夢の意味ではない。覚悟を決めて見る夢のことだ。その夢の実現のために、自分の持てる時間を100%使い、努力する。好きなものだから、時間があればいくらでもそのことに使える。そのような夢は、必ず実現することを、自分の人生で経験したから、そのことを若い人には伝えている。

これまで2回の連載で紹介したように、その頃に見た夢は、今振り返るとすべて実現している。幸いなことに、今でも若い頃と同じ気持ちで研究生生活を続けられているが、毎日、悔いのないように精一杯、好きなことに時間を使って生きていけば、必ず道は開けるものだ。そのことは今でも実感している。一度覚悟を決めてしまえば、「無」の心境となり、迷うことはない。若手の研究員を何人も雇っているが、そんな気持ちで研究をしている者が何人いるか、はなはだ心もとない。「この道に入る」そもその動機づけが、考え抜いた末というより、適当だったということなのだろう。それで大成するほど人生は甘くない。若い人にはぜひ、今のうちに、自分の人生についてとことん考え、覚悟を決めてほしい。たった一度の人生なのだから、毎日を悔いなく過ごせる、そんな夢を描いてほしいものである。